

平成十二年十一月十一日

高知県・シベリア抑留慰霊銅像建立

除幕式 慰霊祭施行

以上の事柄に関与して現在に至り

平成十五年七月十六日をもって齡 八十六。

内孫 二 曾孫 五

外孫 三 曾孫 四 となる。

【執筆者の紹介】

現住所 高知県大津甲

入隊前 小作農

入隊 昭和十三年一月（山砲兵第十一連隊）

第二大隊本部付書記（曹長）

武装解除 昭和二十年九月（安東にて） 引き続

き入ッ

復員 昭和二十三年十一月

復員後 農林省高知食糧事務所（雇員）

昭和二十九年四月（農林技官）

昭和五十三年七月（停年退職）

全抑協 高知県連本部、事務局長・副会長を経

験、現在・中央本部理事

東山さん（先輩）と私は全然無知の間柄でありましたが、この全抑協運動を通じ高知県連発足のための同志として親交を深め、しかも、出身部隊も同じ山砲兵第十一連隊であることを知りました。自来、高知県連組織の中核として、強い友情で団結を守っています。

（高知県 東條 平八郎）

シベリア流浪の日々

熊本県 高洲 安則

私は、熊本県下益城郡松橋町御船で、大正十三（一九二四）年三月三十日生まれ、兄弟姉妹十人の三男坊です。昭和五（一九三〇）年四月、豊川

尋常高等小学校入学。昭和十三年三月、卒業して農業に従事。昭和十九年六月五日、六日の二日間、徴兵検査で第一乙種合格。

昭和二十年二月十四日、出征。夕方、博多駅前に集合し人員点呼があつて、すぐ駅前の丸明館に入つて、夜いろいろな検査。宿泊して明けて十五日朝食後、旅館を出発し途中、熊本県出身部隊は遅れそうだったので駆け足で亀山上皇銅像前に集合整列した。「検査開始」で市内各所で人員点呼やいろいろな検査があつて、夜は駅前通りの旅館に宿泊した。十六日も引き続き検査があり、西日本新聞社屋上で合格者発表があつて、不合格者は故郷に帰された。

合格者は市内の国民学校校庭で被服を受領し私服と着替えて、旅館に行つて私服と靴を郵便局より家に発送した。そこで宿泊、渡満の準備をして寝る。十七日朝早く四時に起床し、旅館を出発。まだ暗い博多の町を歩いて博多港へ。夜明け頃波止場に着き全員輸送船に乗り、八時出帆。荒れ狂

う玄界灘を乗り越えて夕方七時、釜山港に上陸。市内の映画館に入つて折詰弁当の夕食。夜十時、釜山駅で汽車に乗り、大陸の満州へと発車。

車内で注意事項や訓示があつて、酒保品や煙草、リンゴなどが支給された。汽車は京城（ソウル）から東へと進んで日本海の海岸線沿いを北へと走り、元山、清津、凶們を通過して満州へ。

二月二十一日早朝に牡丹江駅着。停車してお茶と折詰弁当が支給された。すぐ発車して夜の十一時頃、鶏寧駅に着き下車した。雪が白く積もつていた。暗い夜道を歩いて部隊に着き兵舎に入つた。夜中の十二時だった。うどんが炊いてあつて、とてもうまかつた。

明けて二十二日、被服受領と身体検査があつた。二十三日は編成替えて、満州第七〇〇〇部隊、荒田隊第四班であつた。三月十日、また編成替えて第三中隊（川田隊）第四班となつた。今日は陸軍記念日。三中隊全員、現在地より東へ二キロメートル地点に移動した。私達より二週間前に

渡満していた戦友達が入って来た。三月中旬頃、永井教官が転勤された。その後には吉澤、宮山両教官が着任された。下旬には平陽鎮に軍馬受領に出され、行きは歩いて帰りは乗馬。久しぶりだったので尻が痛かった。三十一日は身体検査があり、第一区隊と第二区隊に分けられ、四月一日に第二区隊が、二日に第一区隊が林口へ移動して、九日には六個中隊全員が揃って林口での軍隊生活が始まり、五月十九日には私達三中隊は仙洞と代馬溝に分遣された。

私は代馬溝へ十九日より二十三日まで行軍した。二十三日より上代馬溝の駅から山の陣地まで毎日毎日、朝から夕方まで弾薬のピストン輸送だった。八月八日は最後の弾薬輸送であったが、編成替えもあって、初めての古年兵と混成だった。夜は編成祝いと初年兵の教育祝いがあって、全員が酒を飲んで歌ったり踊ったりしたが、これは入隊以来初めてだった、翌日のソ連軍の参戦も知らずに……。

八月九日（木曜）晴。ソ連参戦。全員兵舎前に集合した。泉隊長の注意事項と訓示があり、ソ連初空襲、兵舎外の原野の木陰に避難した。装具や全荷物を各人の輜重車に積んで山の陣地近くに引越し、夕方より弾薬を各人の輜重車に積んで穆稜まで徹夜で輸送。途中、照明弾の光る下を人馬とともに歩きながら折り返し、代馬溝に着いたときは夜は明けて十日の朝だった。すぐ前日の山の陣地へ荷物取り。荷物を積んで兵舎前に帰って、そのまま握り飯を食ってすぐ全員代馬溝を後に出発、輜重車を引っ張って歩行軍。夜、磨刀石に着き野営して、十一日早朝より空襲に警戒しながら出発。十二日の十二時頃、林口の本隊に着いて、すぐ被服受領（新品と取り替え）。雨が降って来た。大雨となった。仙洞の小隊はずぶぬれで帰って来た。夜は全員、戦闘準備だ。携帯食糧の持参準備。出発を前に酒宴。大いに飲め、大いに飲めと言って出陣祝だ。

明けて十三日の月曜、雨は上がった。二度と帰

らぬ樺林を一中隊から出発して出て行った。樺林の街を通過しているうちに後ろからソ連軍の戦車が追いかけて来る。山を越えて下り坂を下りて小さな川を渡るときに、後ろの市の瀨戦友の輜重車が横倒しに転んだので、積んでいた荷物（私の大切な物まで入っていた）がなくなつた。それに私はかまわずどんどん急いでいたが、五百メートルくらい満人部落を通過しようとするとき、後ろの山からズドンとソ連軍の戦車の砲撃がして、それまで一列に行進しておつたのが、パーッと道路

いっぱい広がって、兵も士官も我先にと退却。私もこれに負けじと荷物を積んだままの輜重車をガラガラと引っ張って、牡丹江の煉瓦工場の跡らしき所に着いた。他の戦友達もばらばらに分かれて、どこに行ったやら。夜はそのままごろ寝して、目が覚めてから近くの畑からキュウリや西瓜などもぎ取って食べた。ソ連機来襲。速やかに輜重車の陰に身を隠した。そのとき隣にいた木下戦友が、「あーっ、やられた」と言つたのでそばに

駆け寄って見たら、泥が跳ね返って当たつたらしい。弾でなくてよかつた。びっくりした。夕方には貨物廠に食糧や弾薬輸送に出かけた。

明けて十五日、早朝より命令が出た。敵の戦車の肉弾攻撃に爆弾を一人三個ずつ持たされた。命は捨てる覚悟で出て行つたが、途中中止となつた。戦車が来なかつたのだから。しばらくしてまた命令があり、各中隊から三十人ずつ自動車部隊に配属された。三中隊から立野伍長以下三十三人が配属され、出発を待っているうちにソ連機来襲。速やかに道路わきの溝の土手際に身を隠して応戦。空に向けて持っていた小銃で、無駄とはわかつていながら実弾を初めて撃つた。夕方、本隊を出て自動車部隊（五〇三二部隊）の営庭に集合しすぐ編成され、トラック一台に三人ずつ配属された。夜に出発。我々は荷台の上に仰向けに寝転んで、夜の牡丹江市を後にして、どこへ行くのかわからないまま、乾パンをかじり夜空を見ながら、十六日の朝に寧安に着いた。そうしたらソ連

機来襲。降りて近くの官舎跡の家に隠れた。このとき、トラック三台延焼。

明けて十七日（金曜）曇り、雨。東京城の飛行場内に着き、場内を散歩した（日本軍の練習機の焼けたのが点々と散在していた）。私達は格納庫の中に入って久しぶりに酒を飲み、夜半にトラックに乗って出発し、十八日の昼頃、鏡泊湖に着き全員（十八人）下車して湖の畔で炊事をした。近くの畑からいろいろな野菜を取り寄せ、糧秣はトラック六台に満載していたし、魚は弾薬で取ってきて何不自由なく、全員が一カ所に寄って故郷の話などした。夜には酒もどんどん飲んだり食ったりした。砂糖もたくさん積んでいた。のど自慢も出て、仙台出身の新村さん（五〇三三部隊）は大変歌が上手だったので、私も負けじとばかり、ちょうど月がまん丸く出ていたので「勘太郎月夜唄」を歌った（まだ敗戦とは知らないで）。これが最後とは。

八月十九日、朝からトラックに乗り六台、また

別々の行動で出発した。途中道が悪く、車から降りて押してあげたり大難行軍だった。

二十一日、トラックに乗って進行中、前方に何十台も車が停車して動かず、何だろろうかと思っただら、ソ連軍に捕まっていたのであった。ソ連兵士が来て「ダワイ、ダワイ」と言っても言葉はわからず、おしのまねをしたが、気づいたら武器を捨てろとのことで直ちに武装解除。腰に締めていた短剣も捨てた。トラックから全員降りてぞろぞろと歩かされて小高い山に集結した。周り四百メートルの地点に鉄線を設けて、兵士が警戒していた。敗戦とは今日知った。

「流浪の日々」が始まる。私は竹下と二人で行動をとにもする。何も持たない裸同然、乞食よりも悪い。周囲の人は知らない人ばかり。自分さえ生きてゆければ、と自分自身で頑張るしかない。私も、何が何でも倒れるまでとはいつも思っていたから、近くにある青大豆や小豆をちぎってはいろいろな缶詰の空き缶に入れて竹下と分けて、食

えるものは何でも拾って食べて過ごしていた。

この山に五日間過ごしてきたが、二十六日の朝、全員が山を降りて、どこかへ出発した。乞食の行列のようにぶらぶら歩くだけ。少しでも列を離れると「ダワイ、ダワイ」と警戒兵が前後から付いて押している。私は、竹下がずうっと以前から下痢に悩まされ苦しんで歩くので、励ましながらも、二日、三日と歩いていくうちにだんだん行列から遅れて、最後尾から「いつ倒れるだろうか」と心配していたが、行列からも離れるばかり。ときどき雨も降り風も吹くし、太陽にも照らされて、歩かされ歩いていくうちのども渇く。水溜りの水を飲みながら八月も二十九日の夕方、敦化という街に着いた。近くに飛行場があり、場内に入った。大部分の日本人が集まっていた。着いてすぐ食物と薪探しに出かけたが、私と竹下は何も持っていなかったのどうしようもない。まだ配給もないし、自分自身で探さねばならなかった。行軍の夜は休憩した所にごろ寝だった。ここ

では携帯天幕をほとんどの人が持っておられ、私と竹下だけは何もなし。それで、二人で草を寄せ合って寝るようになった。そのうちソ連の指揮で大隊が編成され、私は二三大隊に編入された。このとき竹下は長い間の下痢が止まらず、身体も弱って人の前に出てくるのが恥ずかしいのか気の毒なのか、私がどんなに勧めて引っ張っても草の中から出てこない。私は一緒に帰りたいばかりに頑張って連れてきたのだが、仕方なく諦めて私は大隊の方に入ったが……。

飛行場内にいる間は食べ物も分けて渡してきたが、三十一日、出発準備して夜になってから出発した。

「東京ダモイ、東京ダモイ」と言いながら「ダワイ、ダワイ」と追いついて立てる。夜の敦化の道を歩き続けて約二十キロメートルくらい。開拓団の跡らしき原野に着いて宿泊の準備。天幕を張る人、私と芝戦友は持参品は何もなし。二人で草を寄せ、二人が寝るだけの広さに草屋根を造って、少

し寒かったので抱き合って寝た。二日、三日には一部分の大隊の編成があつて、私と芝戦友は二四五大隊に編入された。ここの地名は沙河沿とか言っていた。開拓団の跡だったので、野菜、大豆、馬鈴薯^{パレイショ}、キャベツ、その他たくさん残っていたので食用に。水は近くに少し大きな深い川が流れていたので、飯盒を持って汲んで炊事と飲料水に使用。薪は川の土手に雑木が生えていて、生木で燃えつきが悪く、マッチもライターもないが何とかした。

九月四日にはソ連の指示で広い所に集合し、初の装具検査があつた。まず先頭から将校が「腕時計（チャースイ）」あるかと言って取り上げて、次は皮製品のカバン（雑のう）、バンド、お金を。次は残りの布のカバン、バンド、鉛筆を兵士が取り上げた。

翌日から使役にも出された。沙河沿の駅へ行って貨車に、衛生品、医薬品、食糧とアンペラなどの積込み作業で、帰りは私達が勝手に粉味噌、粉

醤油、そのほかの物もかっぱらって持ち帰った。

九月十五日にまた編成替え。二六〇大隊に編入されて、二小隊七分隊になった。このときから六分隊と七分隊は誰も天幕を持っている人はいなかったもので、草屋根の家を（二十人入るくらい）造って宿舎とした。炊事は各自飯盒炊飯で、大隊からときどき原穀の高梁とポーミ粉が支給されただけ。大隊に馬屋当番が指名されたが、私と宮田が受け持たされた。だが、馬も牛も入っては来ないで名目だけ。

二十八日、金曜。本部より命令が出された。病人を残して全員、敦化に派遣作業に行くことになった。直ちに集合し、装具担いで出発し、敦化の飛行場に着いて、格納庫を宿舎に班単位で仕切って合宿した。

二十九日より、ここから歩いて二キロメートル地点に日満バルブ敦化工場があり、電動機やいろいろな機械の解体と貨車に積み込むことであつた。

私が作業の合い間に、工場の内外をとるときき散歩のように歩くうちに見かけたことだが、旧日本軍の軍曹の襟章をつけた幹部候補生がソ連軍の残飯を捨てる場所に、ソ連兵が残飯を捨てたときブアーツと駆け寄って、犬猫のように掻き分け探って拾って食べるのを何回も見た。また線路沿いの通路や周辺でも、食べ物でさえあれば何でも拾って食べているのも見かけた。戦時中は元氣旺盛であったのに、敗戦となってこんなに惨めな姿とは夢にも考えていなかった。宮田は一日に九回も便所に行くのでとても無理だから残ると言ったので、私は別れはつらいがこれも運命、仕方なく別れ、夕食してすぐ全員出発。また夜の敦化街を今度で三回通る。

明けて十月十四日朝、収容所に着き、全員交替で天幕風呂に入って二週間の汗を流した。被服受領（防寒用）、敦化の作業に行かなかった人は二六一大隊に転属していた。草屋根宿舎を燃やしたら夜になって雨が降ってきたので、少し時間が

たつてから焼け跡を少し掘って、全員宿舎に入つて一夜を過ごした。

十五日も雨で出発中止。私の大隊に赤牛が二頭入ってきた、出発のときになって入ってくるなんて。私と宮田が受け持ちになっており、宮田が敦化に残ったので、一頭は一小隊の川南さんに受け持たせた。

十六日、火曜、雨晴。長かった沙河沿の収容所もおさらばの時がきた。私は牛の背に久保井班長の装具と私の荷物を積んで、川南さんと大隊の一番先頭を歩いて行くことになった。夜は野営しながら牛を引いて、赤い夕日の満州をこれが最後の見納めかと思いつつ行軍は続く。

十八日は雨で、後大雨となって全員ずぶぬれで行軍している。十九日も雨で少し風も吹く。

明けて二十日は歩いて五日目、鏡泊湖に着いて休憩。一日ゆっくり休んで糧秣受領あり。また、川南さんの赤牛も殺されることになる。

川南さんの装具は私の牛の背に積み、三人分の

荷物を積んで歩いて、私だけが大隊の先頭を牛を引き歩いて行く。二十二日は東京城の飛行場内を通過中、私の牛の背に積んでいた防寒服をソ連の兵士が馬上から盗み取って行った。駄菓子や饅頭など交換しながら近くの日本人の主な官舎街を通ったとき、私に、「兵隊さん、私も連れて行って下さい」、また「○○さんの部隊の誰々さんを知らないですか」と、狂人のように消息を尋ねて呼んでおられた。そんな悲しみ、哀れな声を聞きながら後にして通過して行った。

十月二十三日、晴れ。寧安に着き糧秣受領をし、すぐ出発。牡丹江の温春飛行場を通過して、夕方、愛河と言う旧日本軍部隊跡の兵舎前に着き、全員そのまま疲れたのかごろ寝。私は牛の背から三人の装具をおろして渡し、赤牛も大隊の方に渡して、班長の方に行ってそのままごろ寝。大隊全員が長い八日間の歩行軍に加え、雨と風に二日、ずぶぬれで疲れたのだ。死んだように眠っていた。天幕を張る者は誰もいない。そのまま青天

井。

二十四日、目が覚めたら夜も明けて、太陽も高く上がっていた。雲の中に隠れて見えないが、昨夜雪が降ったのだろう、山にも野原にも雪が真っ白く積もっていた。皆が寝ている上にも積もっていた。私は起きて朝食の準備。班長の分までポミ粉の饅頭をつくり焼いて食べた。

三十一日、水曜。全員また編成替え。私達はそのまま二五六大隊に番号が変わっただけだった。十一月一日に、三個大隊とも全員すぐ隣の掖河收容所に移転した。旧日本軍金沢師団の部隊跡とか言っていたが、立派な二階建ての兵舎であった。戦争で電源は切れて電灯はなし。兵舎前に集合し整列して部屋決め。二中隊と四中隊は二階、本部兼一中隊と三中隊は一階であった。私達は二中隊で二階に上がり、分隊ごとに分かれて休憩し、寝場所も決める。私は久保井班長とペーチカの前に。近頃、他の大隊はシベリア行きが始まっているようだ。私達のこの兵舎は、電源が切れて

いたので水道も出ない。飯盒を持って舎外のマンホールに水を汲みに行き、順番待ちで汲んで帰り、ペーチカでお湯を沸かして班長と二人でお茶を飲む。ときどきは交代で使役に出された。各班交代で二人ずつ、炊事の水汲みと薪取り（薪取りは付近の官舎の家を打ち壊して、自分で持てるだけ持って運ぶのであった）。また収容所の隣に掖河の陸軍病院があり（現在、抑留者患者病院）、この病院の使役にも薪運びがある。毎日交代で、私も三、四日は出た。ちょうど、私も見かけたが寒い日だった。大型のトラックに、病院で凍った死体を枯れ木を積むようにボンボン投げ込んでいた、どこへ運ぶのか知らないけれど。

日がたつにつれ病人もふえ、死者も多数出た。ほとんど栄養失調だ。それもそのはず、戦後五カ月、何も食べない日が多かった。弱った頃に寒さと使役労働に使われ、食糧の支給も悪くなったからである。先月の三十日、私達の班に熊本出身の福本上等兵が入院して来たが、一夜のうちに急死

した（栄養失調だった）。私は部隊も違ひし、入って来たばかりなので話す機会もなかった。同じ日に、高橋、二口、鈴木の三人は入院のため出て行った。

昭和二十年もアツと言う間に過ぎ、二十一年の正月元旦、私はお茶を濃く（苦いように）沸かして水筒かびんに入れて、窓の外につり下げて冷えてから班長と二人でビール代用とし、内地のことを思い出しながら飲んだ。

一月十五日には私達の班に九人入って来た。この中に、横須賀の人でヤクザの親分塩原上等兵がいた。体は力士のように大きく、金の入れ歯もピカピカしていた。背中いっぱい、忍者を中にぐるっと大蛇がとぐるを巻いたよう、両腕は肘のところまで入れ墨をしておられた。この人のおかげで私の班内は大助かりした。要領がよく、人は親切に可愛がってくださる。班内でも遊び事は将棋、花札、マジャン。博打は誰一人、勝てる人はいなかった。収容所長のガロス大佐が急死さ

れた。

二月、三月と日がたつにつれ給食も大分よくなってきたので、患者も出ないようになった。白米の御飯に時には押し麦のようなものがパッと混じり、魚肉の缶詰などもあった。

四月に入り身体検査があった。九日に全員が兵舎前に集合、装具を持つての検査であった。部屋に入って出発の準備をし、翌十日早朝より兵舎を出発して愛河駅へ。二段装置の貨車が待っていた。全員決まった車両に乗り、「東京ダモイ、東京ダモイ」と言われて北へ北へと走り、ソ満国境を渡った。まだ黒龍江の水は凍っていた。シベリア鉄道に入り、ハバロフスクも過ぎてシベリアの大平原をまっしぐら。右はシベリア、左は満州の山々を見ながら汽車は西へと向かっていた。また騙された、東京ダモイと言いながら。

そのうち、チタ、バイカル湖、イルクーツク。バイカル湖を通過するのに一日かかった。やがてシベリア鉄道の分岐点ノボシビルスク駅を通過し

て支線に入った。単線である。

五月に入った。汽車はカザフ共和国の首都アルマアータも通過した。もうこのあたりは野生のほうれん草が沢山生えていた。近くの駅で停車した。ほとんどの人が降りてほうれん草取りに出た。この駅で一中隊と三中隊は下車された（後で聞いたが、アルマアータ郊外の伐採とか）。私達はすぐ汽車に乗り発車した。

五月五日、日曜、晴。淋しい山間の小さな駅に着き、そのまま引込線をゆっくり汽車は一キロメートルくらい行って停車。ホームもなし駅でもない。飛び降りて、少し歩いて畑か丘か広い所に着いた。半分ばかり天幕が張ってあった。淋しい山奥のラーゲルだった（炭坑）。地名はウズベック共和国タシケント地区シャフトマと言った。

五月はそのままラーゲル内で露営して、六日、月曜。全員編成替え。三九九大隊一中隊四小隊に編成された。五月九日はソ連の独ソ戦の戦勝記念日で、ソ連軍の指示で本部前に集合し分隊教練を

させられ、閲兵分別行進もあった。続いて編成替えがあつて、一中隊から四中隊に変わった。作業は、一、二、三中隊は坑内作業、四中隊は坑外作業で、私は、ラーゲルから一キロメートルの地点に貨車駅があり、その石炭積込みに一日出た。

石灰を焼く原料の石割りにも一日。民家に一日、牛馬の糞と石灰を混ぜて土間に塗るのであつた。壁は、石灰を水に溶かすだけで塗つてとても美しくなり、私も初めての経験だつた。この石炭は石ではなく木炭のように軽くて、ちょうど林木を焼いた木炭そっくり（かた炭）。皆は真つ黒になつてノルマがあるから頑張つている。そして作業の行き帰りは二列に並んで歩調をとりながら、必ず日本の軍歌（「歩兵の本領」と「戦友」）を声張り上げて歌いながら出入りしていた。ロスケには日本語がわからないので、わざと大きな声で歌つて歩いていた。

六月の十四日には本部から私達に急に命令指名があり、十日間の予定でコルホーズへの出張で

あつた。仲班長以下九人。私は通訳兼で同行することになった（まだロシア語はよくしゃべれないけれど、命令だから）。十人分の食糧持参でトラックに乗つて、荷台の上で揺られながら山越え谷越え、約二十キロメートル地点の丘か盆地のような所に着いて下車した。まず装具はリングの木の下に枯れかかった草を厚く敷いて置いて作業に出た。作業は、馬三頭を草刈機の前で引かせる。

後ろに鎌がつけてあり、真ん中の椅子に使用者が腰かけて運転する。また草寄せも馬三頭に前からホークを引かせて運転して寄せる。それを私達が大きく寄せて積むのである。二日、三日で済んだら、次はコルホーズの綿畑の草取り。ソ連のマダム達が手伝う。わからぬ言葉でしゃべりながら草を取つていた。私達は十人の予定だったので、一人ずつ交代で飯盒炊きさん。木にある青リンゴは食べ頃で、全員腹いっぱい食べた。夜は干し草の上にごろ寝で、上は青天井、星が見える。時には警戒兵が私を呼んで、民家に寄つて牛乳をも

らってこさせ、皆に分配して飲んだが、とてもお
いしかった。ソ連の警戒兵は黒人二人、白人一人
の三人だった。この付近は綿畑も牧草も広々と続
いて、その合間にリンゴ園がある。

ある日、いつものように綿畑の草取りをしてい
たら、馬に乗った二、三人がコルホーズを見回り
に来た。そうしたらマダム達がパツと話をやめて
草を取り始めた。私達も真似して取りかかった。
月日のたつのは早いもので、十日の予定がもう二
週間になったが、まだ収容所から連絡もない。そ
のうち朝になって出発すると言って来たので仲班
長に伝え、警戒兵のザーシカの指揮で帰りは歩い
て行くことになった。山越え谷越え川も渡り、足
は全員ひざまでずぶぬれで歩き通し全員疲れた。
やっと収容所に着いたときはちょうど太陽が落ち
たばかり。二十八日、私は体の調子が悪くなって
ラーゲル内の医務室に入室した。

七月七日、木曜、晴。突然本部から呼び出しが
あり、各中隊にいる患者と入室者全員、入院のた

め本部前に集合して、夜、トラックに三十二人が
乗せられて、どこかの病院に入院するために出発
した。十日の午前中にタシケント駅から客車に乗
せられて、十一日の午前中にカガン駅に停車し
た。下車してすぐ近くにあるカガン病院に入院し
た。私達が入る以前はドイツの患者が入院してい
たのだろう。現在も十数人が入院されている。私
達も入院してまず入浴。入る前に丸裸になって入
浴して、上がるときに着物と下着を支給されたの
で着替えて、決められた部屋に入ってゆっくり休
んだ（装具と衣服の着替へは全部取り上げられた
が、退院のとき返されるとか）。今日からいつま
でかわからないが療養生活だ。月日はたつて、こ
この夏はすごい暑い。いつも四五度以上、五十度
内外だ。雨一粒も降らない。庭の丸井戸もカラカ
ラだ。病院の中も外も変わりなし。冬も厳しい寒
さ。十月十八日に部屋の移動があった。

年明けて二十二年二月二日、日曜、晴。カガン
病院を退院した。四十三人が退院して夕方、カガ

ン駅で貨車に乗った。夕食が病院から貨車の中まで運ばれてきた。車内ではパンも配給された。夜、発車した。私はこの病院で二百七日、入院生活だった。貨車がゆっくり走って五日目。二月六日、木曜、曇り後晴。タシケント駅に着いた。下車して歩いてタシケント地区収容所本部兼第一収容所に着いた。

ウズベック共和国の首都タシケント地区、本部兼第一収容所に着いて、小休憩し、大型トラックに四十三人乗せられて市内の第五収容所に着く。夕方入所して身体検査があり、宿舍の大西隊に六人配置され、十二日から土木建築の手伝いだった。二十日から作業変更がされ、金井隊に移転して引込線の貨車おろし作業である。三月十一日の夕方、作業より帰ったら急に身体検査があつて、すぐ装具持って営庭に集合し、トラックに乗せられ、夜のタシケント市内を通り、夜明け前にチリチク第三収容所に着いて、十三日から作業に出された。

作業は、こぶし大くらのグリ石をダンプカーに積むことであつた（手で一個一個投げ入れる）。場所はラーゲルから一キロメートル地点の川原。ここの収容所は主に工場に出勤する人が多かつた。私達も石積みが済んでから、農園や排水工事の手伝いに出された。タシケントの春もこの頃は野も山も見渡す限りアンズの花盛りであつた。

四月十六日、水曜。身上調査と入浴があり、十八日は内地へ帰国のためか編成替えがあつた。全員四十八人、営庭に集合して大隊長より帰国についての訓示と注意事項があり、帰国の準備で装具の検査、被服受領。夜には収容所の隅にある病院内で帰国者のために送別会、演芸会をして下さつた。また多種多様、沢山の御馳走もあり、青空バンドの楽団で軽音楽を聞かせて下さつた。収容所の糧食を回しての志で、帰国者にお別れの饞別として上げたとのことでした。パーティーでのこの御恩はいつまでも忘れることはできない。もうアンズの花もいつしか散り果てて、後にはリンゴの

白い花が満開であった。

十九日、水曜、雨。お別れの雨がポトリポトリと。朝早く、帰国者全員四十八人、幌をかぶった大型トラックに乗って発車と同時に、収容所の正門で演芸部（青空バンド）の「蛍の光」の伴奏で見送りを受けた。シーンとして何とも言えない悲しい場面だった。涙がにじみ出た。ポロポロ涙を流す人もいた。トラックはタシケント駅に行ったが都合がつかず、近くの第四収容所の世話で二泊してタシケント駅に着いたら、今度は汽車が待っていた。トラックから下車して貨車に乗り、二十日午前六時半、発車した。二十五日はカザフの首都アルマアータ駅に着き下車し、水を汲んですぐ乗り発車。四月三十日、シベリア鉄道に入りノボシビルスタ駅に着き分岐点だからしばらく停車しすぐ発車。

五月四日、また引込線に入り、松林の中をゆっくり走ってホームもない無人駅に停車、そのまま貨車の中で待つ。五月五日の朝下車して、貨車の

前で集合整列、出発。歩いて松林の中を少し行くとバラック舎があり、身体検査、身上調査や技術員調査もあった。また少し林の中を歩いて入浴と滅菌があった。全員済んでから、また少し歩いて広い所に出た。マルタの収容所。そこで編成替えがあつて、一大隊二中隊四小隊一分隊に編成された。ここに降ろされて全員ががっかりしていた。ソ連の将校が言うには、「早く二週間、遅くとも一カ月ばかりこの収容所で共産主義教育を受けることだ」。ここは穴倉生活である。地下で、モグラの防空壕のようだ。各中隊に割り当てての使役があつた。糧秣受領やパン受領など。

九日は独ソ戦戦勝記念日で、夕方、本部前に全員集合、整列させて、ソ連将校が日本語で、ソ連の歴史の講話と共産主義、ソ連軍の独ソ戦についての朗読があつた。翌日、私はマルタ駅の貨車積み作業（松の木の丸太を押し上げて積むのだった）。行き帰りに見かけたが、通路が見える森の中に小さなバラック舎があつた。その中に寝台が

六人分あったが、その上に死体があった。中には誰もいないようだった。噂によれば、医学のために解剖されると聞いた。そう言えば腹はへこんでいたようだった。でもわからない、解剖の現場を見た者はいないから。

十三日には山の伐採に百五人、派遣されて出て行った。また、どこかの大隊が千五百人入ってきた。

五月十九日は身体検査があつて、一級、二級とに分けられた。私は一級だった。二十日には転属があつた。一大隊より二大隊へ二百人、二大隊から一大隊へ五百人。私はこの日はパン受領に行っていたので駄目だった。移動や転属で戦友達も変わっていく。淋しくなるばかり。三十一日にまたウラル方面から五百人入ってきた。全員、四中隊に編入された。坂本准尉達十四人はコルホーズへ出された。

六月十一日の夕方、命令指名があつた。指名された人は全員装具を持って本部前に集合させられた。

た。大隊長以下二百人、四個中隊はどこかへ出発。六月十二日、私達もイルクーツクへ分遣された。分遣隊長古佐田少尉の引率で、マルタの駅から客車に乗って二時間くらいでイルクーツク駅に着く。イルクーツク市内を歩いてソ連軍の兵舎（戦車隊跡）に着く。早速部屋を決める。三階建ての一階に宿泊することになる。床板もないので、土間のコンクリートの上に毛布や衣服を敷いた（大きなコの字型の兵舎）。四棟建っていて、現在は使用していないが新しい兵舎でもあつた。装具は片隅に置いて、そのまま寝転んで休んだ。

六月の十三日から作業開始。私は病体。日がつにつれ患者が出始めていた。十八日は四十人がマルタの収容所に帰された。私も帰りたかったが、もし内地へ帰る日が遅くなるかと思ったり、残っている戦友にも遠慮して残ることにした。

八月の下旬にもなり少しはよくなったので、久しぶりに使役に出た。便所の汲み取りの作業に

行った。便所の汲み取りとは、兵舎の三階建ての
コの字の両角地下に四メートル角のコンクリート
の穴があり、その穴の中に三人が入って、上から
つり下ろされたバケツにスコップで糞を入れる。

上も三人くらいでつり上げて、貨車かトラックに
また積み乗せる。二日くらいして他のところへ便
所汲みに行つて、三人が中に入ったが作業中にガ
スが発生して、一人が死亡、一人は意識不明に
なったが、後で息を吹き返した。もう一人は無事
だった（以前の兵士の糞である）。

シベリアの夏は日の長いこと、暗い夜を見たこ
とがなかった。一日の労働を終えて宿舎に帰り、
しばらくしてから夕食するが、寝るときも太陽は
まだ高い。朝起きて見たら午前四時なのにもう太
陽が出ていた。八月十三日から私達四人は市内の
製材木工場に勤務することになった。私が通訳兼
指揮者として、西尾、須田、和田の三人。宿舎か
ら歩いて二キロメートル、警戒兵も付かず自由行
動で、毎日毎日真面目に通勤した。作業内容は、

板の製材、機械カンナで板削り、水門の戸造りの
釘打ちの手伝い、時にはバイカル湖畔に伐材上げ
の手伝い、イルクーツクの貨車駅に工場からの石
炭積みにと、二人ずつでの交代で、四人一緒に行
くときもあった。ほとんど工場内での仕事で主で
あった。マダム達と向かい合つて戸造りの釘打ち
が主で、楽しく面白かつた。通勤の往復も、工場
での作業の手伝いも、私達に任せきりであつたの
で、責任を持って毎日欠かさず通勤したのだつ
た。

十月三日、いつものとおり木工場より宿舎に
帰つたらすぐ警戒兵が、「ヤボン、ダモイ、東京
ダモイ」と言つたけれども、冗談だと思つていた
ら本当だつた。私達四人は舎外にある入浴場（百
メートルの所）に行つた。釜に湯が沸かしてあつ
たので、手桶で汲んで体にかけるだけで宿舎に
入つた。出発準備をし、そのまま寝転んで最後の
夜を過ごし、翌四日、土曜、宿舎を出発し歩いて
イルクーツク駅で休憩。このとき、アイスクャン

デーが一本ずつ配給され、おいしかった。汽車に乗りマルタ駅で下車し、収容所までの途中、松林の中で人員調査、被服受領、入浴滅菌などがあがり、全員、共産主義教育の「赤旗の歌」を歌わされた。合唱であつたけれど徹夜で。

十月五日、ラーゲル内で朝食し出発してマルタ駅に集合。人員点呼とアルファベット順に編成替え。雨が降ってきて、雨にぬれて車両決め、帰還式。ソ連将校の講演と車内での注意事項、スターリン元帥の万歳三唱まであつた。そして名前の頭文字のヤの人は残つて、その他全員、名簿順に乗車。私はタの頭文字。車長は棚橋曹長、高辺、竹下、高田、田北など。夜、車内で過ごし、六日の朝、雨にぬれて発車した。

十日、途中の駅に停車して入浴、滅菌して、済んで汽車に乗り発車し、十四日、シベリア鉄道の分岐点に着きしばらく停車。単線に入り汽車はナホトカの方へ走っている。十六日、懐かしい青海が見えてきた。ナホトカ港であり、ここが最終

集結所であつた。ラーゲルも満員のようであつた。汽車は停車した。すぐ装具を持って車内を片づけて下車した。近くにいたラーゲルの人に様子を聞いてみた。聞けば、しばらくすると病院船の高砂丸が入港するらしいので「病弱」の方に入つたがよからうと教えてくれたので、私はすぐ戦友の七人組に相談して「病弱」の方に入ることに決めて、ラーゲルの北の空地に集合した。そして各中隊、小隊とも甲、乙、病弱とに分けられた。

私たちは六七一中隊で、七人は「病弱」の方に入った。全員ナホトカのラーゲルに入所して十月十七日、診察があつた。このラーゲルは最終集結所だけあつて、帰還者名簿が置いてあつた。各県別ごとにあつたので、私も見たら、私の村の出身者が城塚、島崎、上田と三人書いてあつたので、私も後続者のためと思い書いておいた。

十八日、土曜、正午頃、沖の方から高砂丸が入港して来るのが見えた。復員者が決定された。私たちは第三ラーゲル内に入浴に行き、理髪（丸坊

主)して、被服受領と、防寒用品、着衣を返納して、演芸場前と正門通路に集合した。人員点呼と税関検査があつて編成替え。私は六十六大隊十四中隊二小隊に編成された。ここのラーゲルでは民主グループ(共産主義教育)の活動が盛んである。もし教育ができないと帰れないと聞いている。復員者全員、トラックに乗せられナホトカ港の岸壁の波止場に着き下車して、各中隊ごとに整列し乗船を待つ。その間に中隊長より注意事項があり、高砂丸が岩壁に近づいた。夕方、高砂丸に乗船。まず病院船だから先に重病人から、私達はその後に乗船した。日本の看護婦さんが患者一人一人を二人で両方から肩に手を取り合せて乗せて下さった。もったいないくらいだった。この船は四階建ての客船(病院船)であつて、私たち二階の部屋で十七人だった。船室は旅館のようで畳敷きだった。一万トンに近く(九九〇〇トン)、窓も壁も白く、きれいだった。夜半に出帆した。十九日は係の看護婦から日本の事情を聞いたりし

た。二十日の夕方に舞鶴に入港し、小型蒸気船に分乗して港の波止場の上陸し、船内でもらった札を受付に渡して上陸の印を押しもらい、援護局の寮に着いてすぐ入浴、滅菌してから徹夜で身体検査、消毒、注射をして寮の二階へ上がって休んだ。二十一日火曜。被服が交付され、着衣して日本人らしくなった。LS調査とHM調査があつた(このとき、進駐軍の日本人二世からソ連内での状況を聞かれた)。

十月二十二日、水曜。血液検査、レントゲン撮影、携行糧食、乗車券、金六百円も受領して、各県代表の打ち合わせに出席、帰郷準備や戦友達の住所を控えて寮に上がって休んだ。

二十三日、木曜、晴。寮の前に各県別ごとに全員集合、整列。県別の旗を持って、私達熊本県は渡船で東舞鶴駅へ、他の人はトラックで東舞鶴駅へ集合。すぐ汽車に乗り、発車と同時に駅より「蛍の光」の音楽が歓奏された。これを聞いてシーンとなり、涙を流す人もいた。次の駅では

「元気で行こうよ 人生は」を歓奏された。汽車は京都駅に着いて、この駅で東海道本線、北陸本線とに別れ、私達は山陽本線に乗りかえて、大阪、神戸と通過して広島駅に着いたときに、今まで一緒だった戦友近江君と最後の握手をし、手を振り振り別れた。汽車はいつの間にか関門トンネルを通過して門司駅に停車した。

私は下車して鹿児島本線に乗りかえて発車。懐かしい九州路を眺めながら熊本駅に着いた。この駅で大部分下車されたが、知っている人は見なかった。すぐ発車して三つ目の駅、松橋駅に着いた（十五時三十分）。下車してはみたが変わり果てた駅だったので何度も駅の看板を見た。しかし間違いはなく、駅舎に入った。（戦争のときの空襲で焼けたとのこと）

駅を出て歩いているうち、途中で叔母と四年ぶりに会って、一緒に五キロメートルの道を大野川の堤防沿いに家まで話をしながら歩いて帰った。

昭和二十二年十月二十四日午後五時頃、生家に

復員した。

ちょうど秋の稲の取り入れの最中であり、母が団子汁をつくって待っておられたので、腹いっぱい食べた。

【執筆者の紹介】

大正十三年三月三十日生まれ

昭和十三年三月

尋常高等小学校卒業後、農業に従事

二十年二月

召集を受け出征

二十年三月

関東軍満州第七〇〇〇部隊に入隊

二十年八月九日

ソ連参戦

二十年九月

シベリアに強制抑留され、各地を移動し強制労働に従事する

舞鶴上陸

二十二年十月

復員後、農業に従事

従事

二十三年二月

会社に就職

五十二年十一月 全抑協結成に参画し、組織強化に尽力する

現在 会社定年後はシルバー人材センター会員として地域社会で活躍されています。

(熊本県 池上 俊邦)

私のシベリア抑留体験記

熊本県 井上 明

昭和二十(一九四五)年八月十五日、旧満州国錦州省の錦県と言う地で終戦を迎え、翌十六日武装解除となり、奉天省海城に集結し第十中隊に編成され、ソ連軍の指揮下になり抑留生活に入る。

食糧も半分以下になったが、何とか過ごす。昭和二十年十月、貨車に押し込められ、行く先も知らされず出発した。歩哨に聞いても「ダモイ」と言うだけ。途中、貨車の隙間から外を見ていたら

ハイラルとわかり、ソ連に連れて行かれると思った。

一週間余りかかり着いた所は「チタ」と言う小さな街の駅でした。一夜明かし、翌朝、途中何か所か収容所があったが山奥へと連れて行かれ、着いた所は白樺林で何も無い。雪だけが腰まである。白樺の枝を切り三角に組み、個人携帯の天幕をつなぎ合わせて屋根を張り小屋を造り、中央に溝を掘り火を焚き一夜を明かす。翌日より木を切り皮をむき積み重ねて家を建て、落ちついたら一カ月あまりで一番奥へ移動し、本格的に大木の伐採作業に入る。三人一組で、二メートルくらいの鋸一個、斧一個、クサビ二個で、木の周り六メートルもある大木を切る仕事で、大変体力の要る作業です。一人三立方メートルで三人で九立方メートル。できない場合、後片づけで夜中まで残業させられます。また、時には歩哨と村人と手を組み、歩哨が発砲して非常呼集をかけ、皆が集まった間に盗みをするんです。